
Odder ' s Stories

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Odder's Stories

【Nコード】

N7515V

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

決戦を終え三人は。短編から派生した連載！魔法使い剣士と超能力者銃士、そして一王国の王女の三人の能力者の旅は始まったばかり！！

第一話 始まり、始まり。(前書き)

一話を読む前に<http://ncode.syosetu.com/n7176v/>こちらを読むといいよーん

第一話 始まり、始まり。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

あんな納得のいかない結末に、シュダー・アイリスは悶々としていた。

ここは王国側が用意した一室。一軒家とさほど変わらぬ大きさだった。

引き分けといえど、一応優勝者。扱いは素晴らしく丁寧なのだ。

コンコン、と大きな部屋に鳴り響くノックの音。

「誰だ」

「私です」

声の主はセレナだった。

「優勝おめでとうございます、シユダー様」

「気持ち悪いぞお前。」

「……ごめんなさい。一応こう言っ
て回ってるから。」

この大会の優勝者には、自身が欲しいもの……と。セレナが手に入るのだが……

『セレナ嬢は欲しいが、悪いがシュダーの嫁さんになってやれ』

との、グロディ。

「まあ俺もいらんよ」

「言うと思ったわ。よかったー！まだ遊べるわねッ」

「はあ？」

「それだよ！……つと明日は西口から出てくれる？」

「何故突然」

「ひ・み・つ」

セレナは妖艶に微笑んで、人差し指を自分の口へと当てた。

翌日

西口から城を出たシュダーを待っていたのはグロディ・リファレント。

その顔を見るたび嫌な奴にあつたと言わんばかりの表情を見せる。

「なあに。俺もあの嬢ちゃんに言われたのさ」

「はあん？」

「なあよお、ここで男との話なんだが、一緒に旅でもしねえか？」

「・・・ふ。まあいいだろう。オレも暇だしな。」

「私も行くわ」

不意にセレナの声。 案の定この状況になるのを予測済みだったみたいだ。

こうして。

三人の旅は始まったのだ。

「 ところでお前王宮抜けていいのか？」

「駄目に決まってるじゃない。お父様怒ってるわ、きつと」

第一話 始まり、始まり。 (後書き)

短編と大分違いますね
まあ宜しく願います。
お手柔らかに。

第二話 旅と。

「セレナは……セレナはどこだ!？」

「お、王、報告です!勝者とセレナ様がこの国を出たとの情報が!」

「……そうか。あの男二人を指名手配に出せ!」

「は!」

ここは砂漠。

灼熱の中、オアシス変わりの大きな国が佇んでいた

「あ、見えたわ」

セレナが楽しそうに国を指さす。

「せ、セレナ嬢……暑くないのかい？」

汗をだくだく流し、よたよたと歩くグロディ。

「この程度の暑さでダウンなんて貴方も貴方ね」

見なさい、とシュダーを指さす。彼はこの灼熱の中だがコートを外さない。

「北風と太陽の原理を無視ね。素晴らしいわッ」

後ろから抱きつくと前のめりに 倒れた。

「駄目だったじゃねえか!」

「あら？」

「ほっ」

三人がいたのは冷房が効いた涼しい部屋。内装もシンプルでベッドとテーブル、台所だけだろう。

「セレナ嬢、魔法が使えたのか」

「勿論よ。大国の一王女ですもの。術式の一つや二つ出来ないとね」
そう言う貴方は超能力があるでしょう、と羨ましげに言った。

かくゆうこの家を召喚したのも、今も行い続けているシュダーの体温を下げる作業も、小一時間程度ずっと続けている。

「疲れないか？」

「勿論大丈夫よ。」

表情を見ても、余裕の笑みだった。

「ん……………」

二時間程度続けたところでシュダーが目を覚ました。

「もう、プライドとかどうでもいいからこれに着替えなさい」

押し付けた衣装はフード付きの青いタンクトップ。先程よりずっと涼しいだろう。

「……………む」

「文句は無用よ。ああ疲れたあ……………」

どふ、とベッドに倒れる。セレナが倒れたので勿論シュダーは起きれない。

「ちょ、おい！どけ！」

「……………」

そして爆睡である。

「まあそつとしてやれ」

なんとか抜け出せたシュダーを見てグロデイが言った。

「分かってる。おい、この家を出したのはあの女か？」

「名前で呼んでやれよ……………。ん、そうだが」

「ほつ」

「ついでに二時間ぐらいお前を介抱してたぞ」

「……………」

シュダーは顔を青くしセレナの寝ているベッドの方へ向き帰る。

(……………この女)

第三話 お騒がせ

時間は流れ、遂には夜になっていた。
ふとセレナが目を覚ます。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やば」

この儀式魔法、イジーハウス簡易家屋の時間は持つて十二時間。

親切なことに一分前になると終了の前触れとしてカウントダウンが始まるのだが

ピッ

それが始まっていたのである。　そしてあと三十秒。

「ちょ、二人とも！起きて！！」

「んだよ・・・・・・・・」　「セレナ嬢・・・・・・・・？」

人目に触れぬよう、空中に設置してあるので、いくら砂がクッションになってくれる砂漠といえど、落ちれば痛い高さにあるのだ。

万が一怪我をしたとしてもセレナが治せるのだが、空腹も限界。
やる気力は殆どないのだ。

無事に三人は部屋から抜け出し、怪我人も出ずに済んだ。

「この距離なら朝までに着くわ・・・・・・・・　行きましよ」

「おう」

「そうだな」

そう言って足を進めた。

「大将！不審な影が三つほど……」

「どうしますか！」

大将と呼ばれた男。煙草をふかしてこう言った。

「……どおれ、相手にしてみよう」

「近くで見ると大きいわね……この壁」

コンコンとノックするかの様に確かめる。

隣ではグロデイが壁に静かに触れていた。

「厚みは結構厚いな……500メートルは優にあるだろう」

「正門に回りましょう。遠くはないわ」

第四話 小さなミス

正門に回った三人は警備員を探した。

「おかしい……。いないわ」

「いつそのこと壁ぶち壊すか」

「ダメに決まってるでしょ」

こんこんと壁を叩いているシュダーに対し冷静に突っ込む。

「んー、高さは……。50メートル前後つてところかしら」

額に手を添え見据える。厚みも厚みだが高さも高さだ。完全な

防衛網といったところか。

「何する気だよ」

「ちよつと覗き見」

何度か屈伸する。きつと準備が何かだろ。

「よし」

そして、一気に壁を駆け上がった。

「ええええええええ?!」

壁はまっすぐ九十度。その壁を一気に上まで50メートル駆け上がったのだ。

頂上につくと、当たりを見渡し始めた。

「あいつ……。古に東の国に伝わるニンジャなのか?」

「違うだろ……」

それもまあ、素で登ったわけではない。所々にチカチカと光るものが伺えた。

あれは脚力を人間わざでは成せない程まで強化する魔法。

否、脚力だけでなく人間の器官の全てに通用する魔法……

ストレングス
身体強化!

「きゃあ!？」

上でセレナの悲鳴が聞こえる。

「!？」

二人は顔を見上げる。壁の上には彼女はいない。

「……しまった捕まった!」

グロディが頭に人差し指を当てそう言った。

「おい、シュ」

グロディが終わりまで言う前にシュダーは行動に移していた。

シュダーはグロディの腕をつかみ、身体強化ストレングスを用いて跳躍一度で壁を越え、内地に着地した。

セレナはすぐそばに倒れており、二人はそこへ駆け寄った。

「セレナ嬢、大丈夫か!？」

「……落ちただけよ。それよりダメね。不法侵入だわ」

セレナがただただ落ちるという小さなミスで彼らは犯罪者となる。

まわりは銃や剣を持った男たちに囲まれた。

「……なんか違和感が……」

「ここはあの分厚く大きな壁に囲まれているせいで外部から情報が入らないの」

だから古典的な武器を用いているのよ、とセレナが説明した。

「確かに。魔法使いの力の反応も薄い……」

「薄い、つつー事は少なくともいるんだな」

グロディはかぶっていた帽子を目が隠れるように戻す。

シュダーはといと胸元に手をやり臨戦態勢だ。

(戦っては罪が膨れる)

そう判断したセレナは立ち上がり交渉の手に出た。

第四話 小さなミス（後書き）

またルビ間違ってるかしんねえ

第五話 小さなミス？

「私たちは戦う気はありません！どうか銃など下ろしていただけませんか」

だがあちらは険しい表情で銃や剣を構えているだけだった。言葉は通じているはずだ。

「……………お願いです！」

一歩歩み寄ると、引き金を引く。

「……………う、動くな！撃つぞ！！」

撃たれたとしても魔法使いの端くれ。ガードぐらいできる。

“ たかが銃であれば ”。

「警戒を解いてください。何もしません」

解けるはずがない。後ろの男達は臨戦態勢。（まあどちらにしろあちらが負けるはず）

「……………いいでしょう撃ちなさい」

「セレナ嬢！？」「せ、セレナ！？」

「信じてくれないならこうするしかないわ。」

セレナは上げていた両手を下ろし、ゆっくり敵陣に近付く。

「来るな！！撃つぞ！！」

「さあ、撃ちなさいチキン達……………貴方に私が撃てる？」

この時二人はセレナをマジで怖いと思ったのは別の話だが

パンッ

男達の誰か一人が銃を放つ。

「ぐがつぶ…………ツ」

当たった　　が当たったのはセレナでなく・・・

「・・・・・・・・ぐ、グロディ！？あなた何を」

「・・・・・・・・あ、あなた様なら避けられると思っていました
が・・・・・・・・やはりレディを銃の飛び交う中へ入れ」

「シユダー！！」

「わかってる！」

さっきの誰かの一発で、男達はどんどんと撃ち込んでくる。

それを防ぐため、シユダーにバリアを頼んだのだ。　勿論セレナは

「治療するわよ」

第五話 小さなミス？（後書き）

次のお話が・・・

すごく・・・長いです・・・

第六話 小さなミス？

銃弾の雨の中、セレナはグロディの治療、シュダーは防御と苦戦していた。

「おい、こいつらまだ撃ち続けるぞ……」
その声も銃弾で遮られる。

「えー！？ 何？！もつと大きい声で言つてよ！」

「だからああ！ 俺そろそろ限界だつてえ！」

「あ、そお！ 頑張つてねー！！」

「話聞いてた！？」

「よし」

そう言つて彼女はかざしていた両手を戻す。案の定、治療を終えたのだらう。

「死なない程度に攻撃して」

「……へえ」

シュダーの攻撃は一瞬だった。

相手の陣地に入り込み、首を薙ぎ次々に相手を倒していく。
流石、といったところか。魔法も使わず倒していく。

残りの一人 となつたところで拍手が。

『ぱちぱち』とたつた一人だけの。嘘っぽい拍手。

「いやあ、さすがです。本気を出せばこの程度！」

国の上層部だらう。

「……」

三人は警戒を解かない。

「どうです？お茶でもしながらお話でも」

「うちの大將に聞いてくれ」

「え、私？」

シュダーが指さしたのはセレナ。 まあ一番交渉がうまいと言えば

そうだろう。

「……………それじゃお言葉に甘えようかしら」

○○○○○○○○

客室　　というには少々大きすぎる場所。

そこで彼らは待機しろ、と言われた。

「客を待たせるには殺風景過ぎないか？」

シユダーが誰もが思っていた疑問を口にした。

　　そう、殺風景。

お茶のひとつも出ないし、部屋にあるのは人数分のイス。　それもぼろぼろである。

そして何と言っても他に家具はないのだ。

「……………おかしいわね」

真っ赤に塗られた壁、床、天上。まるで、血のように

『それはそうですよ』

ふいに声がする。　モニター室からでもマイクを使って言ってるのだろう。

『貴方方は死ぬのです　　の前にあつて欲しい人物がいます』

壁にドアが現れ、人が

「……………お、お父様……………」

「セレナ、さあおいで」

両手を広げニツコリと笑う。

「そんな野蛮な人間たちと一緒にいないで、王国^{いえ}に帰ろう」

「……………どういう、意味？」

「彼らは指名手配している。　お前をさらったとしてね」

「な……………」

ゆっくりと一歩歩み出す王。

「……来ないで」

「なぜ？」

セレナは二人のもとへ歩み寄る。

「私はうんざりなの。お父様も、お兄様も、王国全部」

「どうして？お前の好きなように作つたじゃないか」

「だから？私の好き？ 違うわ、バカバカしい。」

私を好きに使うように、作つたんでしょ」

その一言で王の笑顔は硬直する。

「皆言ってるわ、王族のくせに魔法使える？気持ち悪いってね」

「……」

「昔お母様たちと話してるのだから聞いてもの！メイドさんだって言ってるわ」

王の顔は、だんだんと暗々になる。

「それに急に優しくしてきたから気持ち悪くて探つたの」

セレナが指パツチンすると、一枚の紙切れが現れた。
フィンガースナップ

「そ、それは　！！」

王と、後ろにいた兄の顔が真っ青になった。

「これは私の力を利用して国を守る計画書」

そう言つてもう片方の指　人差し指を計画書を指す。

すると指先から炎が現れ、一瞬にしてその計画書は灰となった。

「私の魔法はこのためじゃない　否、世界中のね」

「……反逆を犯すというのか……」

「……ええ！あんな国自分からおさらばよ」

「ならば殺せ！！我が国の掟に沿う！！」

「無駄ですよ、某国国王様？」

「……は？」

そういったのはグロディだった。

「この国と貴方様の国、掟が違いましょう？ 他国で起きたことは他国で決める。」

そういう“掟”」

「・・・うぐ」

「セレナ嬢、行きましょう」

「え？ええ」

そう言っただけに三人は逃げたのだった。

第七話 戦士の羽根伸ばしは（前書き）

当分ないようです。

第七話 戦士の羽根伸ばしは

水の都・リクア。

砂漠の中で孤立しているあの国と違い、水資源に恵まれた環境の国だ。

勿論、水の国だからと言って魔法使い達も水魔法のみと限らず豊富だ。

そんな国にあの三人はいた。

「ん〜」

と背伸びをするセレナ。

「涼しいわね。水か通ってるからかしら。気持ち良いわ」

川沿いを歩くセレナ。男陣はというと

木陰で悠々と居眠り中だった。

「………全く」

はぁ、と深々と嘆息する。だがセレナも少しほっとしていた。

王国を抜け、犯罪者として見なされ父親に利用され。

有り得ない昨日が嘘のように平和な今日。

「………長くは続かない、か」

寂しそうに彼女はそう言った。

「セレナ嬢」

「あら、グロディ起きてたのね」

「憂鬱そうだな」

ポケットから煙草を取り出す。そして持っていたライターで火をつけた。

ふー、と息を吐くと煙が舞った。

「決めてるのか」

「………未来………のこと、でしょ」

「ああ」

グロディは浅く煙草を吸う。

「決めてないわ。 あんな国から出られるのも分からなかったのに」
「……………」

彼は無表情のまま吸った煙を吐いた。

「息抜きっつーのもなんだが、今夜この街で祭りがあるらしい。」

「……………本当？」

「ああ。さっき広告を見てな」

「出ましょ」

一気にセレナのテンションが復帰した。

その夜

三人が出たときには大通りらしき場所はもう賑わっていた。

無論、魔法使いも見限り混ざっているようだった。

「そんなこと、忘れて楽しましょようよ」

それがセレナの提案。魔法使いがいても見なかったこと、見なかったこと。

食べ物を食べたり、イベントに参加したりなど、楽しんでいる三人に不幸が訪れた。

能力者・魔法使い強制参加の生き残り対決。バトルロイヤル

勿論他国からの入国者であれど 参加。

「嫌よお、もつと食べたいし遊びたいわあ」

「ま、まあ……食べ過ぎると太るしセレナ嬢、ちょっと休憩ついでに」

「……………分かったわよ」

と言う訳で三人は出場決定になった。

このバトルロイヤルは、祭りの盛り上げ。

その為殺人、死人は出せないのだ。子供も見ているので。

男女混合個人戦なため、セレナ・グロディ・シュダー、三人が戦う
ことも有り得るのだ。

第七話 戦士の羽根伸ばしは（後書き）

ちしゅお・・・

第八話 バトルロワイヤル

『それでは祭りの盛り上げイベントオオオオ！バトルロワイヤル！
！今年も強者がやってきたぜ！！』

と、テンションの高い司会と共にそのイベントは始まった。

『第一戦は・・・おおっとお！？行成本大会初の女性！！』

セレナ・ガパールだあああ！！』

おお、と注目が集まる。

セレナは着替え済みで、普通のジャージを着ていた。概ねそこら辺の安物だろう。

『対するのは 昨年度第三位に君臨した超巨体の奴だアアアア！』

ずずん、と地鳴り。だがこれはその超巨体の持ち主が歩いた音。

グロディとシュダーはセレナを見守るように観客席に居た。

『それではアアア・・・レディ・ゴー！！』

「お前が俺様の相手かあ？ぐっははは！弱っちい細い女じゃねえか」

「下品な笑いな。そんな男は大嫌いよ」

「強気な女は俺は大好きでね」

「あらそ。お生憎様」

刹那。

ほんの小さな風が起きる。

「・・・っは。ぐははは！お嬢さんの魔法はこの心地いい風だけかい？」

「心地いいですって？とんだマゾね。」

「・・・がっは！？」

と言って、彼は地に足を付ける。

ハート・ウィンド
心の風とでもね

「そうね、こうでも名付けましょうか。
そう言っ
て彼女が出口へと振り向いた。

男は足を上げれずそのまま前のめりに倒れ、意識を失った。

こうして一戦目はセレナの圧勝だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7515v/>

Odder ' s Stories

2011年11月11日18時18分発行